

独標 42年

小林俊樹

雷災救助行

「コバチャー行くじゃん……」 昭和42年8月1日午後8時過ぎ、そんな呼びかけで、私を軽トラックに乗せた二木計臣（かずおみ）君（深志5回・山岳部OB）の一声が、その後に続く独標参りの始まりだった。以来42年、その因縁は今日に続く。その二木君もすでにこの世の人ではない。時の非情が、50歳に満たない彼の命を奪ったのは、惨劇後十数年たってからである。

当時、まだ30代前半の青年教師だった私は、松工定時制山岳部の一行とともに、黒部川源流を踏査し（4泊5日）、前々日帰宅したばかりだった。一日の眠りが疲れを癒やしてくれてはいたが、疲労はまだ残っていた。だが、有無を言わせぬ現実がそこにあった。被害の状況は不分明であり、ニュースも一転二転していたが、雷災の現実だけは確かだった。雷についての会話は、二人の間に何もなかった。みだりな憶測や批判めいた言葉もなかった。行路は、今日とは違う梓川溪谷沿いの旧道の夜を、無言で運転する彼と、時々眠気覚ましの雑談で紛らわす私と、それぞれが岩上の悲劇を思いながら、しかも一言も口にしない、奇妙な運転席と助手席だった。それが口数の少ない彼と私の、いつもながらのパターンだった。

深夜11時20分着、赤羽誠校長をはじめとする教師諸氏と、西糸屋当主奥原教永さん（松中69回）の待機する、現地対策本部の夜は悲壮だった。ほとんどが蒼白の表情で、眼だけが光り、右往左往するだけにも見えた。旧知久しぶりの邂逅が、そんな形であろうとは誰しも思っていない。被災の状況も不明確、誰しもが不安と焦燥を胸に秘めて、時だけがいたずらに過ぎていった。ほとんどが無言で、何らかの連絡を待った。もちろん寝る間などない。応急の食べ物ものどに通らなかった。

深夜12時半、現地への出発時間が予告された。断続的に到着するOB諸氏との対応もそこそこ、1時半には三々五々、西穂山荘への登りについた。その多くは無言だったが、一つだけ今でも覚えているのは、何人かの遺体を背負い下ろすことの難しさのやりとりだった。ヘリコプターは遺体を運ばない、というのは当時の常識だったからだ。そのヘリもチャーターできるかどうか？ 疑心暗鬼は募るばかりだった。

西穂山荘の朝まだきは、まさに地獄絵だった。その中で山荘主村上守さんだけが、厳しく的確に、屋内を取り仕切っていた。山荘南側の各部屋は、終日の疲労に耐え、恐怖に顔をひきつり、放心したような生徒たちと、被雷して応急の処置を受けた、痛々しい怪我人の姿だけだった。

救援に駆けつけたOBといえども、初対面者が多い。歳の差もあり、山歴も違う。深志現職の小野朋士さんの指示に従って、それぞれの部署に就いたのは、朝も白々と明けた頃だった。二木君と若手大学山岳部員たちは、独標周辺の遺体収容を担当することになった。私は刻々と変わる事実の記録と、西糸屋本部との情報連絡に当たった。電話のほとんどは、取材報道陣の定時予約に奪われ、学校当局はもちろん、西糸屋との連絡もままならなかった。やむなく電話中継局に、深志関係の優先を強引に頼み、何とか急場をしのぐことができた。

すでに周知のことだが、時の防衛庁長官増田甲子七氏（松中37回）指示による、三重県明野（陸上自衛隊航空学校）からのヘリコプター2機の出動と、松本駐屯部隊・千葉二尉以下三十数名のレンジャー隊が、怪我人や遺体の搬送の大方を引き受けてくれたことが、厳しい現実の時間を極度に短縮してくれることになった。山荘前の臨時ヘリポートからは、岩井二佐率いる2機が、交互に重軽傷者をピストン輸送してくれ、千葉二尉以下が、担架で運んでくれた八遺体は、1時間弱で空輸して終わり、登高中の不安は一挙に解消した。その間の岩井二佐と私の対話？ を記しておく。

岩井「遅くなりましたが、ただいま到着しました」 私「ご苦労さま、大変でしたネ、……、ところで……」（暫く両者無言。）私「ところで……遺……」この言葉を打ち消すように、岩井二佐は挙手の礼をしたまま、「長官命令！何でもやります……。」こう明言してくれた、そのときの記憶は、今でも明確によみがえる。

かく山荘での活動は、2日午後2時40分で終わった。上高地へ下山後の、岳沢側三遺体搬送救助作業も、夕刻7時半終了。疲れ切った一行のほとんどは、多くを語ることなく、自衛隊赤十字車を中にして、ひたすら谷間の悪路を走り続けた。母校着10時55分。なんとも慌ただしい、20数時間の激闘だった。

（因みに二木計臣君の遺稿『深志落雷遭難記』全文を、許可を得て別掲することにした。）

その後の独標

以来42年、（奇しくも昭和42年と同数）の時を閲して、まだ私は独標参りを続けている。何故だかは、自分にもわからない。だがその頃になると、じっとしていられないのも事実だ。あるいは、すでに習性化しているのかも知れない。多くは言うまい。

まだ若かった鈴岡潤一さん（落雷時被災者 当時飯田工高教師）に初めて会ったのは、昭和55年の13回忌当日だった。いつの間にか、毎年、追悼登山が知られていたのか、山荘での初対面は、村上守おやじを通してだった。以来間歇的な交友が続いている。

深志高校の教師になったのは、落雷の翌年。当該学年（21回生）との、直接のふれあいはなかったが、少なくとも1年間は、同じ屋根のもとに生きた。

その後は、同窓や同僚の何人かや、教え児の誰彼などと同行したが、ほとんどは上高地からの登りだった。ひどい雨降りの何年かもあった。やむなく手前の丸山で黙祷で終わったこともある。時には新聞記者と出会ったこともあり、気の進まぬ取材を受けてネタにもなった。

長年の間には、当然何人かの校長さんも同道した。新設の新穂高ケーブル利用の最初は小原元亨校長との同行時だった。

忘れられないのは、焼失前の山荘の一室での村上守おやじとの、前夜の一献だった。コッヘルの薬缶いっぱいのお酒に酔い、酔うほどに声高になり、岩稜を偲び、天を恨み、地を呪い、傍観者たちの勝手な批判に抗弁し、顔も知らない17歳を、間接に弔いもした。従業員にたしなめられたことも、しばしばだった。そのおやじさんも今はいない。

故人といえば、独標を経ての行き帰りの縦走で、しばしば立ち寄った、岳沢の上條岳人さんも、もうこの世の人ではない。岳沢・西穂山荘間の新道を発想した彼に、沢筋の偵察

を頼まれたこともあった。

公職を去ってからは、新築の山荘と、守さんの孫の文俊さん（昭和42年生まれ）との交友が続く。同行する人々の顔ぶれも、ずいぶんと若くなった。卒業生ばかりでなく、現役の諸君の数も随分と増えた。犠牲者の同年生も年ごとに数を増した。献花も焼香も重くなった。かつて山荘のおやじが持たせてくれた、可憐なクルマユリが何とも懐かしい。

そして今年、奇しくも21回生卒業40年の記念の年（平成21）に、全国各地から集まった34人との雨中の追悼には、一入（ひとしお）の感慨があった。時の重傷者を含めて、みないい親父やお袋さんになっている。11人は17歳のままだが、集まった人たちはもう還暦に近く、母校の高橋校長はじめ、若い山岳部員を含めた20名とが一つになった「めぐり来ぬ今年」の時は終わった。西穂独標への憶いは、まだ風化してはいない。

（H21.9.25）（深志4回・元教師）

